

副詞「いよいよ」を通して見た出来事成立 に対する話し手の捉え方

ルチラ パリハワダナ

要 旨

副詞「いよいよ」は焦点の局面への近づき・到達を描写する用法及び進行の度合い拡大を表す用法を有する。前者において出来事の成立が間近に迫っていること、あるいはついに成立したことを表現する。この成立はある過程の極限の局面として描かれ、描写の焦点がこの極限に置かれる。更に、焦点の局面として、現状から想定しうる極限の状態や予測が確定的となる段階が取り立てられる場合があり、これらも前者の下位用法として位置づけ可能である。

一方、度合い拡大を表す場合、何らかの変化性のある事態・出来事を修飾し、その進行の度合い・程度、量、範囲などの拡大を表す。この場合も描写の焦点は進行過程の極限にあり、度合い拡大しながら、極限に向かって進行するものとして出来事が描かれる。従って、両用法は語源的な意味を保ちつつ、焦点を当てる進行過程の極限を通して連続するのである。

本稿では、各用法の構文的特徴を明らかにしつつ、副詞が文に付加する〈話し手の捉え方〉について検討した。

【キーワード】「いよいよ」、成立時期、限界達成、度合い拡大、極限

1. はじめに

副詞「いよいよ」は、その一用法において出来事の成立時期を描写する。

(1) 十分間の休憩の後、いよいよ内藤の出番になった。 (夏)

(1)'十分間の休憩の後、内藤の出番になった。

「いよいよ」を省いた(1)'においては事態の成立が出来事描写的に表現されている。一方、(1)における「いよいよ」は、「内藤の出番はいつですか?」という疑問文に対し、「いよいよです」という解答を与えるものである。従って、「いよいよ」を出来事の成立時期を描写する時間副詞として位置づけることができる。しかし、その成立時期は発話時を基準とする時間軸における具体的な時期ではなく、むしろ出来事の成立時期に対する話し手の捉え方の表現である⁽¹⁾。では、果たして「いよいよ」は出来事の成立時をどのような時期として描写するのだろうか。

「いよいよ」はそのもう一つの用法において、例(2)のように出来事の進行の度合い拡大を表現する。

(2) 激務に疲れて彼の目のくまはいよいよ深くなりしみが頬にまで波をひろげていた。(王様)

上記の例(2)の「いよいよ」は「いつ?」という疑問文に解答を与えるものではないので、出来事の成立時期を描写するものではないと言える。工藤(1983)において指摘されているように、この用法の「いよいよ」は「いよいよ、怪しからんことです(p.180)」といった静的状態を描写することも可能で、程度副詞的な側面も有する⁽²⁾。

その一方で、例(2)のように出来事の進行の仕方、つまりアスペクト的な要素を描写する点において、時間副詞的でもある。様態変化の進行といった出来事そのものの進行の仕方を描写するこの度合い拡大の意味は、先述した成立時期の描写の意味といかなる関連性を有しているのだろうか。

本稿では、「いよいよ」の現れる文の構文的・意味的特徴を分析しながら、文における1)「いよいよ」の意味・用法、2)諸用法の意味的関連性を明らかにする。その上で、従来の研究で取り上げられてこなかった、3)「いよいよ」を通した出来事の成立に対する話し手の捉え方の表現についても検討したいと思う。

なお、記述的なアプローチを取る本研究では、論文末に挙げる小説30冊から採集した「いよいよ」を含む文の実例130を分析対象とする(実例の論文中の引用の際に、作品名の略を()内に示す)。

以下において、

2. 先行研究における扱い、

3. 「いよいよ」の意味・用法とそれらの連続性

の二節に分けて考察を行う。

2. 先行研究における扱い

森田(1989)において「いよいよ」の用法は、前より上の段階へと程度が高まっていく場合

(3)「愛情はいよいよつゆのり、二人は離れられない仲となった」(p.155)

及び状態が時間的に進行してクライマックスに達する場合に分けられている。後者は更に極限に近づく一歩手前(例4)、ほぼ極限に達し、もはやその先を持たないぎりぎりの線である場合(例5)、最後の線がついに現れることを示す場合(例6)という三つに細分類されている。

(4)「いよいよ出発という時になって雨が降り出した」(p.155)

(5)「いよいよとなるまで腰を上げない」(p.155)

(6)「これで彼の政治生命もいよいよおしまいだ」(p.155)

森田(1989)における「いよいよ」の記述は辞典としての記述であるため、「状態が時間的に進行してクライマックスに達する」用法における時間的進行の意味やクライマックスの具体的な意味、出来事そのものの程度の高まりを表す用法と前述の用法の「時間的進行」の詳細や違い、それぞれの用法の構文的特徴について明らかにされていない。

飛田・浅田(1994)では、1)ある状態の程度が高まる様子を表す場合(「冬の訪れとともに父の病状はいよいよ悪化した」)、2)重大な時が到来する様子を表す場合(「次はいよいよ日本選手団の入場であります」)、3)判断がある一点に落ち着く様子を表す場合(「この手柄で次期部長はいよいよ疑いないところだ」)に分類されている(p.88)。それぞれ、「最高」に向かつての程度の段階的な近づき、重大の時の到来、判断のある一点への落ちつきとして説明されており、その共通点としてある到達点に向かつての進行を読み取ることができる。しかし、飛田・浅田(1994)も、副詞の用法を辞典として記述している文献であるので、「最高」「重大の時」「ある一点」に具体的

な説明を与えていない。なお、飛田・浅田（1994）では、「いよいよ」は用法1）においては状態を表す述語を、用法2）では、動詞述語や名詞述語（文末用法及び慣用的表現）を、用法3）では、判断を表す述語を修飾するということが記述されている。

仁田（2002, pp.243-244）において、「いよいよ」は、時間関係を表す副詞の下位類である時間の中における事態の進展を表すものとして分類され、「極限性と深いつながりを有する」進展様態型の副詞として「ますます」「どンドン」などと共に位置づけられている。

(7) 「妻のからだはいよいよ弱ってきた。(島尾敏雄「家の中」)」(p.243)

つまり、仁田（2002）では、本稿で言う進行の度合い拡大を表す用法に記述が限定されており、出来事の成立時期を描写する用法を異なる用法として区別して捉える記述は見られない。「極限性に深いつながりを有する」という表現からすれば、両者の連続性を重視していると推察できる。

以上見てきたように、先行研究において出来事の成立時期を表す「いよいよ」の用法は「クライマックス」や「重要な時」への到達として記述されている。しかし、この「クライマックス」または「重要な時」はいかなる時間的性格を持つものなのか、いかなる過程の「極限・クライマックス」なのかは明らかになっていない。「いよいよ」を手掛かりにしながら、これらの疑問に解答を与えることによって時間副詞が文に添える意味を検証することができると考えられる。以下において「いよいよ」の具体的な意味・用法を確認しながら、「いよいよ」が文に添える話し手の出来事実現に対する捉え方について検討したい。

3. 「いよいよ」の意味・用法とそれらの連続性

3.1 「いよいよ」の諸用法

「いよいよ」は副詞「いや（弥）⁽³⁾」の母音交代によりできた「いよ」の反復形として定着したと考えられている。「いや」は接頭辞「い」が、物事がたくさん重なることを表す「や」に付いてできたものとされる（『日本語源大辞典』p.148）。「いよいよ」は古語においては、「①前よりもいっそう程度が強まるさま。ますます。（中略）②対話的な文に用いることが多く、確認する気持ちを表す。たしかに。まさしく。まちがいなく。（中略）③実現を期待する状態が長く続いていて、今やっとな実現しようとするさま。ようやく。（『角川古語大辞典』p.338）」という意味で用いられたとされている。

語源的な意味からすれば、例（2）のタイプの度合い拡大を表す用法が「いよいよ」の中心的な意味であると考えられるが、表-1が示しているとおおり、現代語においては例（1）のタイプの焦点の局面への近づき・到達を表す用法の方が圧倒的に多い。本稿では、便宜上量的な現れを基準にしながら、現代語において最も一般的な用法から見ていくことにする。

表-1 諸用法の量的内訳⁽⁴⁾

用法	実例数
1) 焦点の局面への近づき・到達	91 (70.0%)
2) 進行の度合い拡大	39 (30.0%)
合計実例数	130

3.1.1 焦点の局面への近づき・到達を表す用法

この用法を更に (a) 出来事の成立時期を描写する場合、(b) 極限状態を描写する場合、(c) 事態に対する予測が確定的となったことを表す場合に大別することができる。

(a) 出来事の成立時期を描写する場合

では「いよいよ」はどのような文に現れ、出来事の成立時期をどのように描写するのだろうか。先ず、出来事成立の有無の観点から考えると、「いよいよ」の現れる文は、未実現の出来事を表す文であっても、既実現の出来事を表す文であってもよい。

(a-1) 焦点の出来事の実現の有無

(a-1-1) 未実現の出来事を表す述語と共起する場合

先ず、未実現の出来事の成立時期を描写する場合について、動詞述語文 (a-1-1-1) 及び名詞述語文 (a-1-1-2) に分けて、成立時期の描写の仕方を検討する。

(a-1-1-1) 動詞述語文の出来事成立時期を描写する場合

(8) 村田英次郎は、内藤の試合のあった三日後、具志堅の世界戦の前座として出場し、相手を五ラウンドでノックアウトしていた。十二戦して十一勝無敗一引分。この圧倒的な戦績を引っさげて、いよいよ東洋の王座に挑戦するということのようだった。(夏)

(9) 朝とか晩に走ったりしていたんで、おかしいとは思っていたらうけどね。そのうち五月になって、誕生日がきたんで、いよいよジムに行って本格的にやろうと思った。(夏)

上記の例 (8) の場合、「東洋の王座に挑戦する」という出来事の成立が焦点であり、発話時においてその成立が間近に迫っていることが表現されている。この文の場合、「挑戦する」のは村田英次郎であるので、三人称主体の意志的な出来事に対する話し手の見方が表現されている。一方例 (9) において、「ジムに行って本格的にやる」段階が焦点となっており、現段階、すなわち、「朝とか晩に走ったりしている」段階から、焦点の段階への移行は一人称主体 (= 話し手) の意志的行為として近い未来において実行される予定であることを表している。

「いよいよ」が文に添える意味は、発話時以前から出来事の成立が話し手の焦点となっていたこと及びその焦点である成立が発話時において間近に迫っていることである。発話時における成立への近づきは無論のこと副詞の意味の時間的な側面として捉えることができる。一方、その成立を到達点、いわばゴールとし、そのゴールへの到達が間近に迫っていることを表す副詞の意味の側面は話し手の捉え方を示すものである。

「いよいよ」において、上記の二つを結びつける時間的過程やその長さは「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」のように強く暗示されるわけではない。一方、出来事成立が焦点となるためには、発話時以前から話し手はその成立を、意識的であれ、無意識的であれ、いずれ起きるだろうものとして予期しなければならないと思われる。その予期が中立的な場合もあれば、期待や懸念を伴う場合もあり、従って、何らかの期待感、懸念感、緊張感を生じさせるものである。「いよいよ」は成立が間近であるという時間的な意味に成立局面に時間的な焦点を当てる意味を付加する。なお、「いよいよ」の現れる文の望ましさについては (a-2-7) 節で取り上げる。

「いよいよ」は成立が焦点になっている出来事に対して用いられるので、未実現の意志的な行為

を描写する場合、その実行が予定されていて、しかも（三人称主体の出来事の場合）話し手に事前に知られているものでなければならないという意味的な制限が働く。その上、予定・計画としての焦点になりやすさは個別の動詞の語彙的な意味によって異なると考えられる⁽⁵⁾。例えば、一人称主体、つまり話し手自身の動作に対する「??いよいよ行きます」は容認度が低いが、「いよいよ出発します」は比較的容認度が高い。予定・計画の実行段階として焦点を当てやすいからであると考えられる。また、以下の例(10)のように「～ことになりました」を用いて報告として述べることにより、焦点の局面として一層取り立てられると考えられる。

(10) 「いよいよ、明日、都落ちすることになりましたから」太郎は、千頭さんに言った。

(太郎)

「いよいよ」が未実現の出来事の成立時期を描写するもう一つのパターンとして、シタ形式の述語文に現れる場合が挙げられる。次のような場合である。

(11) 影村課長に、ちょっと残ってくれといわれたとき、加藤はいよいよあの返事をしなければならぬときが来たのだと思った。(孤高)

(12) 「こら！ 悪魔！ いよいよ、ブンをやっつける機会がやってきたぞ」(ブン)

(13) 出発はいよいよ五日に迫ってきました。我々としては、自分の心以外に全く日本に持っていく荷物はありませんから、心の整理だけに没頭しております。(沈黙)

焦点の出来事、つまり例(11)の「あの返事をする」こと、例(12)の「ブンをやっつける」こと、及び例(13)の「出発する」こと、はまだ成立していない。述語動詞として「やってきた」「迫ってきた」「近づいてきた」などの、問題の「時」が迫ってきていることを表すシタ形式の述語が用いられ、その意味と「いよいよ」の意味が組み合わせることにより、焦点の出来事が発話時において成立間近であることが強調される。このタイプの文の述語動詞として動詞「(～)きた」が(補助動詞、または本動詞として)頻繁に現れる。

(a-1-1-2) 名詞述語文の出来事成立時期を描写する場合

「いよいよ」が未実現の出来事を描写するもう一つのパターンとして名詞述語文と共に起る場合が挙げられる。

(14) 来年になると「××君もいよいよ高校生!」とか何とかいう記事が出て、女の子たちはいよいよ熱狂的にファンになるのだ。(太郎)

(15) フン先生はもう一枚原稿をめぐった。いよいよ本文である。(ブン)

(16) 彼は伊勢屋のことしか考えていなかったが、自分の育った町にも、これでいよいよおわかれなんだと思うと、なんとも言えないものが、胸に迫ってきた。(路傍)

このタイプの名詞述語文に現れた場合の「いよいよ」は、名詞が表す局面への到達は以前から焦点となっており、ついにその焦点の局面に到達しようとしていることを表す。名詞の表す意味カテゴリーとしては、新しい局面（「高校生」「小学生」「社会人」など）、周期的出来事・季節（「シーズン」「お歳暮の季節」「夏休み」など）、(予備的な段階に対する)本格的な段階（「本文」「夏本番」「本番」など）、開始（「スタート」「開幕」など）、クライマックス（「大詰め」「決勝戦」など）、終局（「終盤」「最終回」「お別れ」など）、重大な事態（「結婚式」「収穫」「戦争」など）、対象や到達目標（「山頂」「ゴール」）などが見られる。

いずれも、ある段階的推移の一局面を切り取るものであると考えられる。その推移の中で重要な局面に焦点が当てられ、そのステップへの移行が近づいていることが「いよいよ」により表現

される。

副詞「ついに」も名詞述語と共起する用法を持つ。「ついに完成」「ついに公開」「ついに登場」「ついに完売」「ついに終了」「ついに絶滅」などはいずれも「いよいよ」に言い換えが可能であり、また上記の例の「いよいよ」も同様に「ついに」に言い換え可能である。「ついに」は実現に向けて進む（段階的）過程の最終局面としての目標達成局面を描写する。従って、間近に迫った成立を描写する「いよいよ」のこの用法と共通の場面を描写可能である。

また、1. はじめにの節で記したように、「いよいよですね」という風に「いよいよ」自体を名詞述語として用いることが可能である。この場合表現されるのは、出来事・事態の成立が間近に近づいているということであり、次に述べる既実現事態の、焦点の局面への到達を表すためには用いられない。ここから、未実現の事態に対して、その成立が間近に迫っていることを表すことが出来事の成立時期を描写する「いよいよ」の基本的な意味であることが窺われる。

一方、「いよいよ高校生」という風に名詞述語を修飾する場合、「いよいよ高校生になる」でも、「いよいよ高校生になった」でもあり得るが、未実現の事態の描写に用いられることが多いので、この節で取り上げた⁽⁶⁾。

(a-1-2) 既実現の出来事を表す述語と共起する場合

次に動詞述語文と共起し、既実現の出来事の成立時期を描写する場合について考察する。

(17) 鳥飼は、いよいよ死体の発見された現場を見せた。こういう恰好で、と彼は当時の状況を説明した。 (点)

(18) 畠に出ると、できるだけ麦の穂のあいだにかくれながら、我々の小屋にいたる山の方向に進みました。この時、少しずつ霧雨が降ってきました。日本の梅雨がいよいよはじまったのです。 (沈黙)

(19) 頭の中は整然としていた。いよいよ繭を作る段階に入った蚕のように、自分の頭の芯まですきとおって見えるような気がした。 (孤高)

この場合、成立以前から話し手の焦点となっていたある出来事がついに成立したことが表現される。例えば、例(17)の場合、「死体の現場を見せてもらう」という出来事は一連の過程の一環であり、話し手の焦点となっているものである。ついに、その焦点の局面に到達し、出来事が成立した際に「いよいよ」が用いられる。つまり、この場合も、実現に至る過程において成立局面が焦点になっており、ついに話し手の注目しているその局面に到達したことが表現される。

上記の例(17)や例(1)は目的達成局面への到達を表すものであり、一方(18)は周期的な出来事の開始を表すものである。(19)は焦点の段階への到達を表す。「いよいよ」は動詞述語と共起し、このように既実現の出来事を表す場合も、先述した未実現の出来事を表す場合も、焦点となる出来事として描写対象とするのは、名詞述語文の場合と同様に、開始、新しい局面・段階、季節などの周期的な出来事、本格的な段階、目的達成局面、終局などである。

この用法の「いよいよ」はシタ形述語と共起する。述語のシタ形式で文の出来事が既に成立したものであることが表現される。「いよいよ」が文に付加する意味は、この出来事成立が以前から焦点になっていたものであること及びその成立局面へついに到達したことである。未実現の出来事の成立時間を描写する場合と同様に出来事が開始したことを示す開始限界、または達成・成立したことを示す終了限界が動詞自身の語彙の意味において存在すること、あるいは文中明示的に設けられていること、または文脈で明らかになっていることが、「いよいよ」の共起を可能にする

条件となる。

「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」と同様に既実現の事態の描写のために「いよいよ」が用いられるのは原則的に出来事成立の直後である。言うまでもないが、昔の出来事を回想する過去回想のシタと「いよいよ」は馴染まない。上記の4副詞の場合と同様に述語のシタ形式はアスペクト的な意味として限界達成を表すものと考えられる。

以上、出来事成立時期を描写する用法について分析してきた。「いよいよ」は動詞述語文に現れながら、その文の出来事の成立時期を描写する場合、以前から焦点となっていた出来事の成立が発話時において間近に迫っていること、あるいはついに成立したことを表現する。一方、名詞述語文に現れる場合、名詞が表す以前から焦点となっていた局面へと事態がついに到達しようとしている（または、到達した）ことを表す。

以下において、「いよいよ」の構文・意味的な特徴を整理しておきたいと思う。

(a-2) 出来事の成立時期を表す「いよいよ」の特徴

(a-2-1) 焦点となる出来事の特徴

動詞述語文に現れて既実現の出来事の成立時期を描写する場合も、同様に動詞述語文に共起し、未実現の出来事の成立を表す場合も、名詞述語文の場合と同様に焦点となるのは開始、新しい局面、ある段階、周期的な推移における季節などの一局面、本格的な段階、達成目標、終局などである。

(a-2-2) 共起述語の形式

構文の特徴から見ると、シタ形を述語とする文に現れる場合が、スル形の文に現れる場合より多い⁽⁷⁾。終止形以外にも条件形、連用形、連体形、意向形と共起する。また、「しなければならない」(義務)、「しようとした・している」(直前)などの文末形式との共起も可能である。述語動詞は意志・非意志、自動詞・他動詞のいずれのタイプであっても「いよいよ」の共起は可能である。

(a-2-3) 肯定述語との呼応

もう一つ注目すべき構文的な特徴に述語の肯否がある。出来事の成立時期を描写する「いよいよ」は動詞述語と共起する場合も、名詞述語と共起する場合も原則的に肯定形と呼応する⁽⁸⁾。この点において「やっと」「ようやく」と類似し、非実現の懸念の的中を表す「ついに」「とうとう」とは異なる。「いよいよ」が文において果たす役割は成立時期の限定、しかも基準時を媒介した限定であるので、生起しない出来事に対して用いられないのは当然であると言える。この点において「ついに」と比較した場合、予期的中というモーダルな意味よりも出来事の成立時期を描写するという時間的な意味に重点が置かれていると言える。

(a-2-4) 共起述語のアスペクト的性質

アスペクト的な側面から「いよいよ」と共起する動詞述語について考察してみると、「いよいよ」と共起するための条件として、出来事の内部局面構造における開始、または終結局面が明確なものでなければならないことがわかる。つまり、「いよいよ」が限界達成というアスペクト的な意味を描写するのだと考えられる。

従って、開始局面も終結局面も有さない「ある」「いる」「違う」「住む」などの状態動詞とは「いよいよ」が共起しない。名詞述語と共起し、一見限界を全く有さない事態を描写するように見え

る「いよいよ高校生！」などの場合も、その局面に到達したことを表現するのであり、従って「いよいよ高校生になる・なった」の「なる・なった」が省略されていると考えても良い。また、明確な開始限界または終了限界を持たない動作動詞とも「いよいよ」は共起しにくい。例えば、「??いよいよ食べる。」という文は文脈の助けを得なければ落ち着きが悪いが、「いよいよ食べ始めた」のように語彙的手段により、開始局面を明示すれば許容度が上がる。「いよいよ」はある局面への到達または到達可能な局面への近づきを表すので、開始または終了限界を内在する変化動詞述語文に典型的に現れると言える。述語動詞自体に限界がない場合も、その限界が文中に明示的に述べられていれば、あるいはコンテキストで設けられていれば、「いよいよ」がその文に共起可能になる。

(a-2-5) 名詞性

後述する極限状態を描写する場合と共通する特徴であるが、「いよいよ」はある程度の名詞性を有していると言える。そのことが「いよいよである」という風に名詞述語化が可能であることから窺える。名詞化の用法は先行する文脈に依存した一種の省略形であるが、いずれにしても、ある時期、局面としての名詞化が可能であることを示すものとして捉えられる。

(a-2-6) 出来事成立までの時間量

(20) 起工以来四年二カ月、いよいよ第二号艦が自力で航海する瞬間はやってきた。 (戦艦)

上記の例が示している通り、出来事が焦点となってから、実際の成立が間近に迫るまでかなりの時間量を所用することがあり得る。しかしながら、この時間量の大小は「いよいよ」によって表現されるものではない。上記の例(20)において「起工以来四年二ヶ月」という表現によって時間量が明示的に述べられているのであり、「いよいよ」はその時間量を示しているのではない。「いよいよ」は、焦点となっている成立局面に近づいていく過程を暗示すると思われるが、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」のように成立に至る過程自体に重点を置かない。従って、「やっと」のように困難を乗り越えての実現であることや、「ついに」のように段階的過程を経ての実現であることなどが問題にされない。それ故、実現に向かった過程に重点を置く副詞の場合のようにその過程を、(心理的に)時間のかかったものとして描写しない。過程を暗示させながらも、その成立直前の局面を際立たせて描写するのである。

(a-2-7) 望ましさ

「いよいよ」が出来事の成立局面を切り取り、それに焦点を当てるといふ点から考えれば、出来事成立は話し手によって期待された望ましいもの、あるいは懸念された望ましくないものとして描写されるだろうと推察可能である。果たしてそうなのであろうか。

飛田・浅田(1994)では重大の時が到来する様子を表す用法に関して、「原則としてプラスマイナスのイメージはない(p.89)」としている。出来事の成立時期を描写する用法に関しては、本稿のデータの中にも「いよいよ」自体が望ましさを描写していることを明確に示す証拠は見当たらない。「いよいよ」の意味以外の文中の表現や文脈を手掛かりに分類しても、中立的な描写が大半を占め、次に望ましくないものの数が多かった。望ましいと判断できる例は最も少ない⁽⁹⁾。以下の例(21)は望ましくないと判断できる出来事を、(22)は望ましいと判断できる出来事を、(23)は中立的な出来事を描写している。

(21) 月のない夜だったが、黒い海の向うに水平線が見えると、加藤は重苦しいほど暗い夜の中に、いよいよさげられない人生の区切点へ近づいていくような不安を感じた。

(孤高)

(22) 「加藤さん、いよいよスイートホームへ滑り込みっていうわけですね。うらやましいですな」

(孤高)

(23) スピードを落した船は岸に沿っていよいよ真珠湾奥深くはいって行った。(数学)

例(23)が示している通り、たとえ望ましきに対して中立的な描写であっても、「いよいよ」を省略した単なる出来事描写の文に、「いよいよ」は何らかのモーダルな意味を付け加えている。やはり、出来事の成立を以前から焦点にし、その成立を待っている緊張感⁽¹⁰⁾と成立によるその緊張感からの解放が表現されていると考えられる。更に、出来事の成立が次の展開に何らかの意義を持つものとして談話の中で表現されると言える。その緊張感は興奮などとして明示的に述べられる場合も見られる。

(24) 一年がかりでくわだてた故郷訪問が、いよいよその終局を迎えようとしているという興奮もあった。久しぶりで父や兄に逢える喜びもあつた。(孤高)

(b) 極限状態を描写する場合

「いよいよ」は「いよいよとなったら／なれば」「いよいよの時」という形を取り、「いざとなったら」「いざという時」と同様に現在の状況から考えられる極限状態を想定し、その極限状態が実現した場合を表現する。この用法における「いよいよ」は名詞性を持っており、前述の成立時期を描写する形の省略体としての捉え方も可能である。しかし、成立時期を描写する用法のように必ずしも個別出来事の成立時期を描写するのではなく、慣用句化し、想定可能な極限状態を描写するのである。

焦点の局面として描かれるのは、条件文の前件の状況から仮定できる極限の状態であることが多い。この場合、懸念される極限状態の成立が仮定されることが一般的で、従って話し手にとって望ましくない事態の描写に用いられることが多い。下記の例(25)では、前件の状況から想定できる極限状態の成立を仮定として述べられており、次の(26)の「いよいよの時」も他の選択肢の取れない極限状態を表している。

(25) 「うむ、だいぶ病気が進んどるが、いよいよになったら、わしが手術をしてやろう」

(ブン)

(26) (おれは、雪の中のビバークをおそれてはいない。だがそれはいよいよのときのことである。小屋があれば、小屋に泊るのが正攻法である)

(孤高)

上記の例(25)のように、仮定条件の形で、想定上の極限状態の成立が表現されることが多いが、次の例のように「いざ出来事が実際に成立してみれば」といったように確定条件として表現されることもある。この場合の「いよいよ」は想定上の極限状態を表すためではなく、<確定的な状態>という意味を表すために用いられている。

(27) ところが、入学試験、入学試験と、志願者たちが騒いでいたほどのこともなく、土地がらのせいもあるのだろう、いよいよとなったら、応募者の数が意外に少なくて、中学へ願書を出した者は、無試験でみんな入学を許されることになった。(路傍)

(c) 事態に対する予測が確定的となったことを表す場合

この用法は森田(1989)で「最終の線がついに現れることを示す」用法として、飛田・浅田(1994)において「判断がある一点に落ち着く様子」として位置づけられている。この用法においては、話し手の焦点であったある予測がついに確定的となったことが表現される。例えば、次の例(28)では「この先に海があるはずである」という予測は話し手の中に以前からあり、焦点となっている。その目的地に近づいている過程は恐らくあっただろうと思われるが、「いよいよ」は焦点であった予測が確定的となったことを表現する。

この用法の「いよいよ」は、「～に違いない」「～間違いない」などの確信を表す表現と共起することが多い。

(28) ところどころ、乾いた草むらが砂のくぼみに影をつくり、また間違えたように畳一枚ほどの貧弱なナス畠があったりしたが、人影らしいものは、まるでなかった。いよいよこの先が目指す海にちがいない。 (砂)

以上、焦点の局面への近づき・到達を表す用法を、出来事の成立時期を描写する場合、極限状態を描写する場合及び事態に対する予測が確定的となったことを表す場合に大別しながら考察してきた。いずれも出来事・事態が焦点の局面に近づいたまたは到達したことを表現する。焦点の局面に至る過程は明示的には述べられないが、その局面はある過程の到達点、いわば極限である。以上見てきたように、出来事の成立、極限的な状態、確定的な状態といった、向かってきた到達点がついに間近に迫ったあるいは、その点へついに辿り着いたという意味を表すためにこの用法の「いよいよ」が用いられると言える。

3.1.2 事態の進行の度合い拡大を表す用法

この用法における「いよいよ」は大抵「ますます」に置き換えることができ、事態の進行の度合い拡大を描写する。

前述したように古語の「いよいよ」は「前よりもいっそう程度が強まるさま。ますます。(『角川古語大辞典』)」という意味を表す⁽¹¹⁾。また、語源的に「副詞「いや(弥)の母音交代によりできた「いよ」を重ねて強調したもの(小学館『日本語源大辞典』2005初版)」であり、上代の頃から「いよよ」の形で使われたとされている。すなわち、「いよいよ」はそもそも「いよ」の形で「物事のたくさん重なる様」という意味を表し、その反復型を取ることによって「ますます」「いっそう」という度合い拡大を表す意味を強めていったと考えられる。

「いよいよ」は進行の度合い拡大を表す場合、形容詞の連用形に変化動詞「なる」が後接してできた「～くなっ(てき)た」という述語形式と典型的に共起する。動詞の連用形(+「なる」)を修飾する場合も多い。共起する動詞述語は終止形(シタ形式もスル形式も見られる)、及び連用形を取ることが多い。また、単独の形容詞述語を修飾する場合も見られ、その場合、終止、連用のみならず、連体形の述語とも共起する。

「いよいよ」は上述の述語形式と共起し、述語形式の表す様態変化の進行、動作の進行の度合い拡大を表す。つまり、「いよいよ」はこの用法において描写可能なのは何らかの変化性を有する進行で、しかも度合いを拡大しながら進行する様態の変化や程度・量の変化である。

(29) 稜線にかかると風はいよいよ強くなった。風のために雪は吹きとばされて、夏道が出ているところもあるし、思わぬところに、吹きだまりがあったりした。(孤高)

- (30) 合田からテスト撮影の話を聞かされると彼女はまっ赤になった。そして、車のなかで春川の名を聞くと、いよいよ昂奮し、服も髪も化粧もととのえてこなかったことの不平と落胆をぶちまけた。(王様)

この用法の「いよいよ」は上記の例(29)、(30)のように進行の度合い・程度の拡大を描写する場合が多いが、範囲拡大や量的拡大なども描写する。

- (31) 日を追うにしたがって災厄が土のしたでいよいよ広範囲なものにひろがってゆくことが手にとるようにわかったが、俊介としてはなにひとつ手の打ちようがなかった。(王様)

- (32) 「暴徒」の数はいよいよ、ふえた。一年生が一番、熱心に、上級生にとびかかった。(太郎)

度合い拡大を表す場合、否定述語との共起も可能である。無論、単なる非成立の度合い拡大は理論的に描写不可能であるので、共起する否定述語は何らかの度合い・程度変化、様態変化を表すものに制限される。例(33)のように変化動詞「なる」との共起によって変化性の意味を浴びた否定述語を修飾する場合もあれば、(34)のように可能形との共起により可能性の消滅の度合いを描写する場合も見られる。

- (33) このことがあって以来、庄吾は村の口ききたちと、いよいよそりが合わなくなった。(路傍)

- (34) はじめのうち、ぼくは太郎にこの疲労感をおぼえていた。彼の家庭の状況を知ってみると、いよいよ手のつけられないような気がした。(王様)

この用法において「いよいよ」の表す意味は度合い拡大であることが「～ばかりだ」、「すれば、するほど」などの形式と共起することからも窺われる。

- (35) その前の汽車といえば、函館発の十一時三十九分の《アカシヤ》がある。それ以前は、普通が二本と、六時初発の急行があるが、不可能事はいよいよ拡大するばかりである。(点)

「いよいよ」のこの用法に関して飛田・浅田(1994)では「プラスマイナスのイメージはない(p.88)」と述べられている。確かに、望ましさに対して否定的と言える場合も(例36)、肯定的と言える場合も(例37)、中立的な場合(例38)も見られる。しかしながら、度合い拡大を表す用法の顕著な傾向性として、望ましくない事態の進行を描写する場合が多い(39例中32例)ことが挙げられる。データの中に望ましいと明らかに判別可能な用例は2例しか見られなかった。この点において度合い拡大を表す用法の「いよいよ」は、焦点の局面への近づき・到達を表す用法の「いよいよ」と異なる。また、肯定的な事態を頻繁に描写する「ますます」とも異なると言える。

- (36) 「しかし、そこで気がついたふりしたら、事はいよいよ深刻になるからな。何も気がつかないような顔で言っさ。《へえ、遠いとこって、どこか北海道へでも行くの?》」(太郎)

- (37) 「ありがとう。支部がいよいよ発展するように祈るよ。町の青年たちも、どんどん君たちの支部に誘ってくれたまえ」(忍ぶ)

- (38) 私はまた霊安室へ通じる散歩道を辿った。陽はいよいよ明るく、雪はいよいよ白い。下駄の歯に食い込む雪を、私は木の幹でぽんぽんとはたいた。その乾いた音は遠くまで響き渡った。(冬)

度合い拡大を表す「いよいよ」は副詞「ますます」及び「どんどん」と類似性を持つ。「どんど

ん」も形容詞述語と共起し、様態変化の度合い拡大を、動詞述語と共起し、動作・変化の度合い・程度、動作の反復量の拡大などを表す。しかし、度合い拡大を表す「いよいよ」を常に「どンドン」に置き換えられるわけではない。「どンドン」は原則的に動詞否定と共起しない。一方、「いよいよ」と異なり、「どンドン歩いた」のように動作動詞述語を修飾することができる。「どンドン」には上述の用法の他に成立の多回性を表す用法があるが、「いよいよ」にはこの用法がない。

3.2 「いよいよ」の二つの用法の相違と連続性

3.2.1 「いよいよ」の二つの用法の比較

以上考察してきた、「いよいよ」の二つの用法を、相違点を比較する形で、以下においてまとめておく。先ず、構文的な特徴から比較すると、次の表-2が示している通り、以下のような相違が見られる。

- 1) 焦点の局面への近づき・到達を表す用法と異なり、度合い拡大を表す用法の「いよいよ」はその意味からも明らかになるように、完全に未実現の出来事とは共起しない。
- 2) 度合い拡大を表す用法の「いよいよ」は名詞述語と共起しない上、名詞述語化も不可能である点で、前者の用法と異なる。
- 3) 焦点の局面への近づき・到達を表す用法の「いよいよ」は原則的に否定と共起しないが、度合い拡大を表す用法の場合、「～なくなった」などの形を取り、比較的容易に否定述語と共起可能である。
- 4) 焦点の局面への近づき・到達を表す用法の「いよいよ」は後者の用法と異なり、形容詞述語と共起しない。

表-2 「いよいよ」の共起条件

述語の形式		用法	焦点の局面への近づき・到達			度合い拡大	
			出来事の成立時期		極限状態		予想に対する確信
			近づき	到達			
終止形	未実現	スル	○	×	×	○	×
		シタ	○	×	×	×	×
		名詞述語(「いよいよN/Nだ」)	○	○	×	○	×
	既実現	スル	×	×	×	×	○
		シタ	×	○	×	○	○
		名詞述語(「いよいよNだった」)	△	○	×	×	×
連用形		○	○	×	×	○	
連体形		○	○	×	×	○	
条件形		○	○	○	×	×	
意向形		○	×	×	×	×	
命令形		×	×	×	×	×	
否定形		×	△	×	×	△	
名詞述語化(「いよいよだ」)		○	×	×	×	×	
「いよいよの時」		×	×	○	×	×	
形容詞述語		×	×	×	×	○	

「△」は制限的に現れる場合を示す。

意味的な側面から比較してまとめると、以下のことが明らかになる。

- 1) 焦点の局面への近づき・到達を表す用法の場合の描写対象は、開始または終了限界を内在する出来事に制限され、限界達成というアスペクト的意味を限定するが、度合い拡大を表す場合、必ずしもこのような共起制限が働かない。アスペクト的に見れば、後者の場合、内部局面構造の展開局面にある出来事を限定し、限界に向かっていく展開の仕方を描写することもできるが、単なる程度拡大、(数)量的拡大も描写できる。
- 2) 前者の場合、出来事実現に対する望ましさに対して中立的であることが多いのに対し、度合い拡大を表す用法の場合は、望ましくない出来事の描写に用いられる傾向が見られる。

3.2.2 「いよいよ」の二つの用法の連続性

以上、「いよいよ」の用法を、焦点の局面への近づき・到達を表すものと事態の進行の度合い拡大を表すものに大別し、考察してきた。語源的に両者が「いや」を基にできたことを考えれば、両者の間に何らかの連続性があるはずである。現に、いずれの意味を表すのか判別しがたい下記のような例からも両者の連続性が浮き彫りになる。

(39) 「どこまで、行かれるんですか？」

「金沢へ、行こうかと思ってね」

太郎はいよいよ、うつつうしくなって来た。これでは分裂症でなくても尾行されている、と信じたくなる。

「僕も金沢へ行くんです」

(太郎)

「いよいよ」が焦点の局面への近づき・到達を表す場合及び展開の度合い拡大を表す場合を、それぞれ次のように図表化できる。

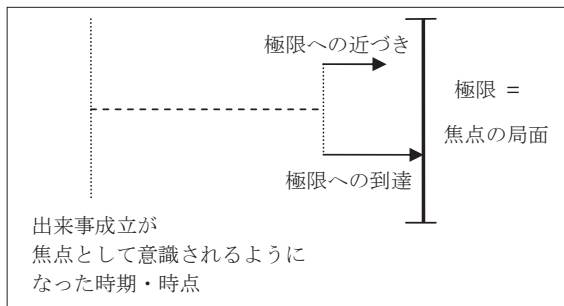


図-1 焦点の局面への近づき・到達を表す用法

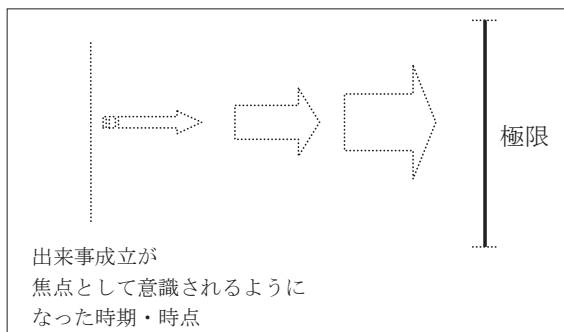


図-2 展開の度合い拡大を表す用法

前者の場合、出来事の成立、極限状態への到達、または事態が確定的となるといった、出来事が進行し、到達する焦点の局面は、いわば進行過程の極限である。その極限への到達は間近に迫っているあるいはその極限について到達したことが前者の用法の「いよいよ」の表す意味である。

一方、度合い拡大を表す後者の用法の場合、拡大を表現するためには、先ず時間軸に沿っての出来事の進行がなければならない。その上、その進行は、進行していく出来事の諸局面を比較した場合に、度合い・程度、量、範囲などが小から大へと変わりゆくものでなければならない。拡大しながら、極まっていけば、到達するところは極限である。「いよいよ」は語彙の意味において表す度合い拡大的な進行はこのような極限に向かってのものであると考えられる。すなわち、両者において<極限>は時間的な視点となっており、両者の意味がこの極限を媒介して連続していると言える。

重なり・反復といった「いよいよ」の語源的な意味が、量、度合い・程度の拡大の意味を生じさせる。拡大し、極まりながら、進行する出来事の向かう先が極限である。つまり、度合い拡大の意味は重なり、増えて大きくなっていくという進行過程の様態からのみならず、極限という進行の到達点の性質からも生じたものであると言える。

一方、焦点の局面への近づき・到達を表す用法の場合、事態の時間的視点がこの極限に置かれていると言える。進行過程は当然存在するものの、重点はその過程に置かれているのではない。進行し、極まった過程の最終点である極限を切り取り、そのいわばゴールへの近づき・到達を強調する。

このように、「いよいよ」の二つの用法は極限を媒介して連続し、一方はその極限に焦点を当てながら、それへの近づき・到達を表し、もう一方はそれに向かっての度合い拡大を表現していると解釈可能である。

4. 終わりに

本稿の考察を通して、「いよいよ」が文に付加する捉え方として、1) 発話時以前からの出来事成立に対する把握、2) 極限（成立局面、または拡大の限界）を焦点とした事態の把握、3) 極限から見たその極限に向かってくるものとしての出来事成立の把握が見えてきた。

これらについて詳細に検討しながら、事前把握の過程が重要な意味要素となる「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」等を含む時間副詞を体系的に記述する必要がある。更に、談話における時間的焦点を設定する装置として時間副詞がどのように機能しているのかという点についても体系的な検討が必要である。限界達成というアスペクトの意味との相関性に関しても「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」などを含めた体系的な検討を通して、時間副詞がアスペクトの意味とどのような相関関係の構造を成すのか明らかにしなければならない。更に、度合い拡大の意味についても「ますます」「どんどん」「次々と」「一層」等を含めた体系的な記述、「更に」「その上」などを含めた検討が必要である。上述の課題を探索しつつ、「いよいよ」を含む時間副詞を日本語教育においてどのように扱えばよいのか検討することを今後の課題としたい⁽¹³⁾。

注

- (1) 出来事の成立時期を描写する用法において、該当の出来事が未実現の出来事であれば（後述する成立時期への近づきを表す場合）、基準時が原則的に発話時であると考えられるが、既実現の出来事であれば（後述する成立時期への到達を表す場合）、発話時に先行する出来事時であることが多い。
- (2) 程度副詞は典型的に形容詞述語と共に起し、静的事態の程度を描写する。「いよいよ」は度合い拡大を表す用法において、形容詞を述語とする文に現れ、その形容詞を修飾することができる。後述する例(38)はそのような例である。このことから、度合い拡大を表す用法における「いよいよ」はより程度副詞的であることが窺える。しかし、終止形の形容詞を修飾する場合であっても、例(38)のように異なる時点における「白さ」の比較である点において時間的過程を読み取ることが可能で、時間副詞的な側面も有していると言える。
- (3) 『日本語源大辞典』では「弥」が次のように定義されている。「副詞。(数詞の八と同様。物事のたくさん重なるさまを表す)①いよいよ。ますます。いやが上に。②最も。一番。③非常に。たいそう。」
- (4) 用法1) または2) のどちらとも取れる場合もあるが、上記の表-1はそのような例を最も想定しやすい用法に分類し、含めたものである。
- (5) 計画に関する情報を動作主・聞き手と共有している文脈であれば、このような制限が解除されると思われる。個別の動詞にどのような制限が働くのか、その解除は語彙の意味の段階性を示すものなのかなどについて詳細に調べれば、予定性の概念とその概念の情報論との関わりを明らかにできるとと思われる。
- (6) コーパスの中に名詞述語文を修飾する「いよいよ」の例は全11例見られるが、その中の「いよいよ名詞だった」というタイプのものは2例しかない。その2例の中の1例が「次はいよいよ内藤の試合だった」(夏)という風に基準時において未実現の事態を表すものであり、もう一方は、未実現、既実現のいずれの解釈も可能なものである。なお、未実現であることが「来年」「今度」などの発話時以降の時間を表す表現の共起によって明示的に述べられる場合もある(例14)。
- (7) シタ形述語：37例、スル形述語：10例。小説から収集したデータであるので、文体の影響も幾分あるだろうと推察できる。なお、会話文における分布については本研究では検証していない。
- (8) しかし、出来事の成立時期を描写する場合も、様々な条件の下、否定と共に起り可能になることもある。次の例はそのようなものである。
- 夜が近くなり、目標が近くなると、不思議に頭がはっきりした。いよいよ動けなくなると、ピッケルにすがって息の乱れを調整した。(孤高)
- この例の場合、変化動詞「なる」の後接、可能形、条件形との共起により、「動けないという否定的な事態がついに生じたときに」という意味を表している。
- (9) 客観的根拠に基づいた分類は不可能だが、本稿のデータにおける出来事成立の時期を描写する82例のうち、55例は中立のもの、19例は望ましくないもの、8例は望ましいものと判断できる。
- (10) ここで言う緊張感とは期待・懸念の両要素を含むものである。
- (11) 万葉集に「ますます」と共に「いよいよ」が用いられた例(「よのなかはむなしきものとしときいよいよますますかなしけり(巻5-793)」)が見られ、度合い拡大を強調して表現している。古語にはこの他「弥益々に」という副詞及び平安末期から使われ、現代語としても使われる動詞「いや増す」が見られる。
- (12) 「いよいよ寒くなる季節が到来する」のように文中に共起し、「いよいよ」の描写対象ともなり得るが、直接的な共起述語とはならない。
- (13) 国立国語研究所(1964)が刊行している『分類語彙表』では「いよいよ」も「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」及び「ますます」も使用頻度の高い基本語彙の7000語の中に位置づけられている。つまり、これらは日常的に頻繁に用いられている語彙であり、中級レベルにおけるその体系的な指導が必要であると思われる。
- 日本語教育では「いよいよ」は2級(日本語能力試験N2)レベルの語彙として扱われている。焦点の局面への近づき・到達を表す「いよいよ」の用法と類似性を持つ「やっと」「ようやく」「ついに」

「とうとう」も、同様に度合い拡大を表す用法と類似性を持つ「ますます」も2級(N2)レベルの語彙として扱われている(国際交流基金編『改訂版 日本語能力試験出題基準』では、2級(N2)レベルの語彙として6000語、1級(N1)レベルの語彙として10,000語が扱われている。)

中級前半、後半の日本語教科書では「やっと」及び「ますます」の導入が比較的多く見られるが、「いよいよ」を含むその他の副詞が全く現れないものも少なくない。中級の日本語教育において「いよいよ」について次の点を教える必要があると考えられる。

- i) 「いよいよ」の二つの用法
- ii) 焦点の局面への近づき・到達を表す用法の「いよいよ」と「ついに」の類似性・相違及び度合い拡大を表す用法の「いよいよ」と「ますます」の類似性・相違
- iii) 前者の用法が原則的に肯定述語と呼応する点、及び後者は肯定のみならず一部の否定述語とも共起可能である点

時間副詞は文にとって必須成分ではないものの、出来事成立に対する話し手の捉え方を文に付加する重要な役割を果たすものである。シタ形式の述語と共起し、焦点の局面への近づきを表す「いよいよ」の場合、「いよいよ」の現れにより、<実現済み>という時間的意味ではなく、<実現間近>という時間的意味が表現される。このように、「いよいよ」や類似する副詞に対する理解は、日本語の時間的把握の仕組みそのものに対する理解を深めるものであり、従って、日本語教育における体系的な扱いが必要であると言える。

付記

本稿は2010年度白馬日本語研究会での口頭発表を基に加筆・修正したものである。貴重なご指摘を頂きました同研究会の諸先生方に心よりの感謝の意を表したい。

用例出典

『新潮文庫 100冊 (CD-ROM版)』:(あすなろ)「あすなろ物語」,(雨)「黒い雨」,(王様)「パニック・裸の王様」,(女社長)「女社長に乾杯!」,(風)「風に吹かれて」,(草)「草の花」,(恋人)「エディプスの恋人」,(孤高)「孤高の人々」,(さぶ)「さぶ」,(忍ぶ)「忍ぶ川」,(植物)「砂の上の植物群」,(新橋)「新橋烏丸口青春篇」,(人民)「人民は弱し官使は強し」,(数学)「若き数学者のアメリカ」,(砂)「砂の女」,(世界)「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」,(戦艦)「戦艦武蔵」,(太郎)「太郎物語」,(沈黙)「沈黙」,(点)「点と線」,(夏)「一瞬の夏」,(ノート)「人生論ノート」,(野火)「野火」,(二十歳)「二十歳の原点」,(花)「花埋み」,(冬)「冬の旅」,(ブン)「ブンとファン」,(村)「風立ちぬ・美しい村」,(雪国)「雪国」,(路傍)「路傍の石」

参考文献

- (1) 川端善明(1950)「時の副詞(下)——述語の層について その一——」『國語國文』第33巻第12号, pp.34-54
- (2) 金水敏・工藤真由美他(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店
- (3) 工藤 浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院, pp.176-198
- (4) 工藤 浩(1985)「日本語の文の時間表現」『言語生活』6月号筑摩書房, pp.48-56
- (5) 工藤 浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3モダリティ』岩波書店
- (6) 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- (7) 国際交流基金編(2002)『改訂版 日本語能力試験出題基準』凡人社
- (8) 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- (9) 酒井悠美(1999)「類犠牲のありかた——はやさを表す副詞をめぐって——」『国文学解釈と鑑賞』第64巻1号, pp.61-72

- (10) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- (11) 西原鈴子 (1991) 「副詞の意味機能」 国立国語研究所 『副詞の意味と用法』, pp.45-80
- (12) 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- (13) 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版, pp.88-90
- (14) 宮島達夫 (1983) 「情態副詞と陳述」 『副用語の研究』 明治書院, pp.89-116
- (15) 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店, pp.154-155
- (16) ルチラ パリハワダナ (2005) 「長時間経過の末の予見の実現を表す副詞『やっど』『ようやく』『ついに』『とうとう』について」 『金沢大学留学生センター紀要』 8号, pp.29-49
- (17) ルチラ パリハワダナ (2007) 「副詞『どんどん』を通して見た出来事実現の勢い」 『金沢大学大学教育開放センター紀要』 第27号, pp.53-66

- (18) 坂倉篤義他編 (1982) 『角川国語大辞典』 (第一巻) 角川書店
- (19) 前田富祺編 (2005) 『日本語源大辞典』 小学館
- (20) 松村明監修 (1998) 『大辞泉』 小学館

(京都大学国際交流センター・教授)

Speaker's Perceptions of Event Actualization as Expressed by the Adverb *IYOIYO*

Ruchira Palihawadana

Abstract

One meaning of the Japanese adverb *Iyoiyo*, is that some event, at long last, is just about to be realized, or that it has just been realized. It could also express the escalating degree, amount, etc. of a changing state or an event. In the former case, *Iyoiyo* highlights the actualizing phase, expressing that the actualization has reached or is about to reach the extreme point of the actualizing structure. Due to this semantic property, generally *Iyoiyo* is syntactically restricted to sentences that have a predicate with an inceptive or terminating end point. In the later case, it depicts the magnification as one heading towards the extreme point of the magnification scale. Thereby, *Iyoiyo*'s two meanings correlate, having the extreme point as their common semantic property. What *Iyoiyo* adds to the intrinsic temporal meaning of the sentence is the speaker's view of the actualization.

(Professor, The International Center, Kyoto University)